

かの十六夜の女君

——葵巻晩秋の新解釈——

田 村 俊 介

かの十六夜のさやかならざりし秋のことなど、さらぬも、さまざまの好事どもを、かたみに限なく言ひあらはしたまふ。

(二巻100頁)

引用は新潮日本古典集成本に拠る。適宜、傍記する。

一

小稿のテーマは葵巻晩秋の段落、有名な一句の解釈である。「かの十六夜」とあるが、「十六夜」という単語は光源氏が未摘花のもとを初めて訪問するくだりにしか出て来ない。

のたまひしもしるく、十六夜の月をかしきほどにおはしたり。

(略)

君(―源氏)は、誰ともえ見分きたまはで、われと知られじと、抜き足に歩みのきたまふに、(頭中将ハ)ふと寄りて、「ふり捨てさせたまへるつらさに、御送りつかうまつりつるは。

もろともに大内山は出でつれど入るかた見せぬいさよひの

月

(「未摘花」。一卷247〜251頁)

しかし、季節が春であつて「秋のこと」という言葉と矛盾する。一方、「秋のこと」という言葉を重視すれば未摘花との新枕を指すのではと思われてくるが、日づけが「八月二十余日」と明記されている。(「未摘花」258頁3行目〜263頁4行目)。十六夜、秋、二つの単語の間に生ずる矛盾を解消するため、或いは、二つの単語を同時に活かすため、古来、性格の違ったさまざまな仮説が提唱されてきた。代表的なものを一つだけ挙げると、「さやかならざりし」の下に読点を打ち、さやかでなかった春の十六夜の出来事と秋の出来事と、二つを並べて言ったのだとする説がある。もともと河内本系や三条西家本等の本文「……さやかなりし……」を掲出する古注の解釈であつたが、青表紙本系大島を底本とする朝日日本古典選も

かの十六夜のさやかならざりし、秋の事など、……

(注)あの春十六夜の月が朧だった常陸宮での出来事(未摘花【三】)や、また秋の出来事(同【八】【九】)など、その他さまざまの忍び事などを、お互ひに暴露し合はれる。

と解釈する。読点を打つ打たないを別にして、末摘花巻の春の場面と同じく秋の場面と、両方に着目する姿勢だけは室町以来の習いであつた。私もその点は変わらない。が、副題に「新解釈」と銘打つたのは

「かの十六夜」―末摘花の異名

と考えるからである。根拠は通称朧月夜尚侍が花宴巻で「かの有明」と呼ばれている、その命名法である。

いと若うをかしげなる声の、なべての人とは聞こえぬ、「朧月夜に似るものぞなき」と、うち誦じて、こなたさまには来るものか。いとうれしくて、ふと袖をとらへたまふ。女、恐ろしと思へるけしきにて、(朧月夜)「あな、むくつけ。こは誰ぞ」とのたまへど、(源氏)「何かうとましき」とて、

深き夜のあはれを知るも入る月のおぼろけならぬ契り

とぞ思ふ

とて、やをら抱きおろして、戸は押し立てつ。あさましきにあきれたるさま、いとなつかしうをかしげなり。わななくわななく(朧月夜)「ここに、人」と、のたまへど、(源氏)「まろは、皆人にゆるされたれば、召し寄せたりとも、なんふことかあらむ。ただ忍びてこそ」とのたまふ声に、この君なりけりと聞き定めて、いささかなぐさめけり。わびしと思へるものから、なさけなくこはしうは見えじ、と思へり、酔ひごちや例ならざりけむ、ゆるさむことはくちをしきに、女も若うたをやぎて、強き心も知らぬなるべし。らうたしと見たまふに、ほどなく明けゆけば、心あわたし。女はまして、さまざまに思ひ乱れたるけしきなり。

(源氏)「なほ名のりしたまへ。いかでか聞こゆべき。かうてやみなむとは、さりともおぼされじ」とのたまへば、

(朧月夜)

うき身世にやがて消えなば尋ねても草の原をば問はじ

とや思ふ

と言ふさま、艶になまめきたり。(源氏)「ことわりや。聞こえ違へたる文字かな」とて、

「いづれぞと露のやどりを分かむまに小笹が原に風もこそ吹け

わづらはしくおぼすことならずは、何かつつまむ。もし、すかいたまふか」と言ひあへず、人々起き騒ぎ、上の御局に参りちがふけしきども、しげくまよへば、いとわりなくて、扇ばかりをしるしに取りかへて、出でたまひぬ。

桐壺には、人々多くさぶらひて、おどろきたるもあれば、かかるを、「さもたゆみなき御忍びありきかな」とつきじろひつつ、そら寝をぞしあへる。入りたまひて臥したまへれど、寝入られず。をかしかりつる人のさまかな、女御の御おとうとたちにこそはあらめ、まだ世に馴れぬは、五、六の君ならむかし、帥の宮の北の方、頭の中將のすさめぬ四の君などこそ、よしと聞きしか、なかなかそれならましければ、今すこしをかしからまし、六は春宮にたてまつらむところぞしたまへるを、いとほしうもあるべいかな、わづらはしう、尋ねむほどもまぎらはし、さて絶えなむとは思はぬけしきなりつるを、いかなれば、言通はすべきさまを教へずなりぬらむ、などよろづに思ふも、心のとまるなる

べし。かうやうなるにつけても、まづかのわたりのありさまの、こよなう奥まりたるはやと、ありがたう思ひくらべられたまふ。

その日は後宴ごえんのことありて、まぎれ暮らしたまひつ。筆筆の琴ことつかうまつりたまふ。昨日のことよりも、なまめかしうおもしろし。藤壺ふじはらは、晩あけにまうのぼりたまひにけり。かの有明ありあけ、出いででやしぬらむと、心もそらにて、思ひ至らぬ限かぎなき良消よきよ、惟光これみつをつけて、うかがはせたまひければ、

(二巻52〜55頁)

ヒロインが登場してからあと労を煩わす全文を掲出したのは、実線部よりまえに「有明」という単語が出て来ないことを確認してほしいからである。ヒロインの詞の中に「朧月夜」という単語こそ見えているが、「有明」という単語はヒロインヒロの詞の中にも地の文にも一度も出て来ない。ただこの巻冒頭の一文

きららぎの二十日はつかあまり、南殿なんだんの桜の宴えんせさせたまふ。

によつて、二人が逢つた晩に「二十日余りの月」、言い換えれば、「有明の月」が出ていたことがわかり、その女君を「かの有明」と呼んでいるのである。とすれば、十六夜の月が出ていた晩光源氏が訪問したところの女君を「かの十六夜」と呼んでも構わないのではないか。

卑見にもいろいろと弱点はあろう。が、源氏物語五十四帖中、何しろ「かの」の下に月が来る用例——例えば、「かの十五夜」、「かの立待」等——は他に無いのだから、どうしても「かの有明」と「かの十六夜」とが対偶性を持つように解釈する必要がある。

加えて重要なのは縁語法だ。

花宴実線部付近、「限なき」、「そら」、「出で」そして「有明」、全て月の縁語である。

16かのあり明のいいてやしぬらん おほろ月夜の君なり心もそらにて思いたらぬくまなきなといへることはあり明の月に縁なることゝもなり。

(源氏物語古注集成『松永本花鳥余情』)

葵卷実線部付近、「限なく」、「さやか」そして「十六夜」、全て月の縁語である。

二

「さやかならざりし」について卑見と通説の違いを表にまとめておく。(矢印は、見る人→見られる人)。

通説 (「春の訪問」の説明)		卑見 (「秋の事」を修飾)
男→男		男→女
頭中将が光源氏の行方をはつきりとは見なかった。		光源氏が未摘花の容貌をはつきりとは見なかった

次に「さやかかなり」の全用例を列挙する。

- (イ) 容貌かたちきたなげなく、若やかなるほどの、おのがじしは塵ちりもつかじと身をもてなし、文ふみを書けど、おほどかに言選ことえりをし、墨すみつきほのかに、心もとなく思はせつつ、またさやかにも見てしがなと、(「帚木」。一54)

男↓女(四)い たとしへなく口おほひて、さやかにも見せねど、

目をしつとつけたまへれば、おのづからそば目に見ゆ。

目すこし腫れたるこちして、鼻などもあざやかなるところなうねびれて、にほはしきところも見えず、言ひ立つれば、わろきによれる容貌を、いというてもつて、このまされる人よりは心あらむと、目とどめつべきさましたり。にぎははしう愛敬づきをかしげなるを、いよいよほこりにうちとけて、笑ひなどそばるれば、にほひ多く見えて、さるかたにいとをかしき人ざまなり。あはつけしとはおほしながら、まめならぬ御心は、これもえおぼし放つまじかりけり。見たまふかぎりの人は、うちとけたる世なく、ひきつくるひそばめたるうはべをのみこそ見たまへ、かくうちとけたる人のありさまかいま見などは、まだしたまはざりつることなれば、何心もなう、さやかなるはいとほしなから、久しう見たまはまほしきに、

(二) 入りかたの日かげ、さやかにさしたるに、

〔紅葉賀〕。二11)

(六) さやかにも見合はせてまつりたまはず、聞こえたはぶれたまふも、苦しうわりなきものにおぼしむすばほれて、

〔葵〕。二121)

男↓男(一) ありし御面影さやかに見えたまへる、そぞろ寒きはとなり。

〔須磨〕。二220)

男↓女(ト) 明後日ばかりになりて、例のやうにいたくもふかさ

で、わたりたまへり。さやかにもまだ見たまはぬ容貌など、

〔明石〕。二271)

男↓男(ナ) さやかに見えたまひし夢の後は、院の帝の御ことを

心にかけきこえたまひて、

〔濡標巻頭〕

男↓女(リ) いかでさやかに御容貌を見てしがな、とおぼすも、うちとくべき御親心にはあらずやありけむ。

〔濡標〕。三46)

(マ) かたはなるまじき一帖づつ、さすがに浦々のありさまさやかに見えたるを、

〔絵合〕。三102)

(ル) 二十日あまりの月さし出でて、こなたはまださやかならねど、おほかたの空、をかしきほどなるに、

〔絵合〕。三113)

(ヲ) さやかならぬ明けぐれのほど、いろいろなる姿は、いづれともなくをかし。

〔野分〕。四132)

女↓男(ワ) うちきらし朝ぐもりせしみゆきにはさやかに空の光

〔行幸〕。四152)

男↓女(メ) 父大臣は、ほのかなりしさまを、いかでさやかに見た見む、なまかたほなること見えたまはば、かうまで

〔行幸〕。四176)

(ヨ) 山の左右より、月日の光さやかにさし出でて世を照らす。

〔若菜上〕。五102)

(タ) 夕影なれば、さやかならず、奥暗きこちするも、

〔若菜上〕。五128)

(レ) いといたくはぢらひしめりて、さやかにも見合はせてまつりたまはぬを、

〔若菜下〕。五212)

(イ) 例は、なまいはけなきたはぶれごとなども、うちとけ聞こえたまふを、いたくしめりて、さやかにも見合はせてまつりたまはぬを、〔若菜_下〕。五²²⁸〕

(ウ) いたくさやかに書くべしや、あたらし人の、文をこそ思ひやりなく書きけれ〔若菜_下〕。五²³³〕

女↓女(ネ) もの恥ぢを世の常ならずしたまひて、母北の方にだに、さやかに、をさをさし向ひたてまつりたまはず、〔紅梅〕。六¹⁸⁵〕

(ハ) 夕暮^{ゆふぐれ}の霞^{かすみ}のまぎれは、さやかならねど、つくづくと見れば〔竹河〕。六²¹⁸〕

男↓女(ラ) 霧の深ければ、さやかに見ゆべくもあらず。また月さし出でなむ〔橋姫〕。六²⁷⁶〕

(ヌ) 有明^{ありあけ}の月のいとはなやかにさし出でて、水の面^{おもて}もさやかに澄みたるを、〔椎本〕。六³²³〕

(ウ) 七日の月のさやかにさし出でたる影

(サ) 前駆^{さき}うち追ひて、あてやかなる男^{おとこ}の入り来るを見出だして、忍びやかにておはせし人の御さまけはひぞ、さやかに思ひ出でらるる。〔手習〕。八¹⁹⁶〕

こうしてみると、人が人を見するという文脈の場合、「さやかに見る」「さやかに見ない」の目的語が「容貌」に限定される傾向に気付かざるを得ない。「さやかにも見合はせてまつりたまはず(ぬ)」の三例(イ)(ウ)は相手に嫌悪や畏怖を感じているケース。別に考えるべきか。従つて、夢の中の姿を言つた(ハ)(チ)は別として、当然のことながら見る相手が結婚や好色の対象であ

る用例が多い。「女↓女」の(ネ)にしても、「娘が恥ずかしがり屋で、(実の母親にさえ、さし向かいにならない、)まして継父にはさま容貌^{かたち}を見せない」の意がこめられている。後続の文を参照された。当該例もやはり「男に女の容貌がはつきり見えなかつた」と取るのが自然である。

(ウ)の和歌は、冷泉帝の大原野行幸の翌日、フィアンセの容貌を見ましたかと光源氏が玉鬘に問うた時の返答で、表の意が「雪空のため、ほとんど陽光を見ることができませんでした」、裏の意が「帝のお姿をほとんど見ることができませんでした」。当該例も同じく、気象状況と人事と、掛け詞なのかもしれない。いずれにせよ、人事の方の解釈を「どこに行方をくらませたのかはつきりわからない」とする通説は、「さやか」の用法に照らして、いささか無理が感じられるのである。末摘花巻春の段落、頭中将の詠歌「……入るかた見せぬいさよひの月」は確かに私にとつて都合の悪い記事である。だが、私の立場から言うところではなからうか。

実際、光源氏が末摘花の顔をさやかに見なかったことは末摘花巻冬の部を読めばわかる。彼女の赤くて大きな鼻は夜目にもしるくかなり目立つ特徴だったはずだが、それに気付いたのも冬になってからのことである。

ところせき御もの恥ぢを見あらはさむの御心もことになくて過ぎゆくを、またうちかへし、見まさりするやうもありかし、手さぐりのたどしきに、あやしう心得ぬこともあるにや、見てしがなと思ほせど、

(一卷頁一)

光源氏は「手さぐりのたどたどしき」逢瀬に終わったと回想しているのである。特に次の文実線部を本節の最有力資料として挙げておく。

世の常なるほどの、異なることなさならば、思ひ捨てても止みぬべきを、さだかに見たまひてのちは、なかなかあはれにいみじくて、まめやかなるさまに、常におとづれたまふ。

(一卷274頁)

三

賢木巻の一段落(16頁、二行目以降。小見出しは「源氏、参内し、帝と語る」を引用して参考に供したい。当該記事を含む葵巻晩秋の一段落(99頁14行〜100頁9行。小見出しは「時雨する夕暮、三位の中將、源氏を慰める」とよく似ることは一読して明らかだが、これが動く論が続かなくなってしまうので、念には念を入れ、ブロックに分けつつ前から順番に類似性を確認して行く。なお、葵巻の主人、客と言うのは

(主人) 光源氏 (客) 頭中將

であり、賢木巻については

(主人) 朱雀帝 (客) 光源氏

である。

第一ブロック 葵

御法事など過ぎぬれど、正日まではなほこもりおはす。ならはぬ御つれづれを心苦しがりたまひて、三位の中將は常に

まづ内裏の御方に参りたまへれば、のどやかにおはします

参りたまひつつ、世の中の物語など、まめやかなるも、また例のみだりがはしきことを聞こえいでつつなぐさめきこえたまふに、

このブロックでは、主人が退屈し、客が参上して慰めるといふ一文が来る。

第二ブロック

かの内侍ぞ、うち笑ひたまふくさはひにはなるめる。大將の君は、「あないとほしや、祖母殿の上ないたう軽めたまひそ」といさめたまふものから、常にをかしとおぼしたり。

尚侍の君の御ことも、なほ絶えぬさまに聞こしめし、けしき御覽ずるをりもあれど、何かは、今はじめたることならばこそあらめ、ありそめにけることなれば、さも心かはさむに、似げなかるまじき人のあはひなりかし、とぞおぼしなして、とがめさせたまはざりける。

このブロックを見て指摘できる共通性は、最初に頭に浮かぶ女性について、主人は思うままを言わないことである。葵巻、光源氏は源典侍のことを「常にをかしと」腹の中では思っているが口先では「そんなことを言っちゃ、かわいそうじゃないか」と頭中將をいさめている。賢木巻、朱雀帝は自分の妻である臘月夜尚侍との密通について知ってはいながら光源氏をおとがめにならなかった。

第三ブロック

ほどにて、昔今の御物語聞こえたまふ。

(三行略)

かの十六夜^{いざよひ}のさやかならざりし秋のことなど、さらぬも、さまたまの好事^{すきごと}どもを、

このブロックでは、今度こそ洗いざらい、主人は客に打明けることになる。

第四ブロック

かたみに限なく言ひあらはしたまふ果ては、あはれなる世を言ひ言ひてうち泣きなどもしたまひけり。

このブロックでは、「それでは、僕も」というわけで客も主人に打明け話をすることになる。賢木巻、光源氏は六条御息所との「野の宮のあはれなりし曙^{あけぼの}」の別れについて、洗いざらい告白した。葵巻、客である頭中将が具体的に誰との、どんな体験を話したのかは不明だが、「かたみに」「言ひあらはしたまふ」とある以上、やはり、今まで内緒にしていた「好事^{すきごと}」をここで白状したのだと考えるべきだろう。なお、「言ひあらはす」という複合動詞を諸注「相手の秘密をすっぱぬく」というように説明しているが、行幸巻の「申しあらはし（しさま）」は玉鬘が実は

よろづの御物語、書の道のおぼつかなくおぼしめさることもなど、問はせたまひて、またすきずきしき歌語^{うたごころ}なども、かたみに聞こえかはさせたまふついでに、かの斎宮^{さいぐう}の下りたまひし日のこと、容貌^{かたち}のをかしくおはせしなど、語らせたまふに、

われもうちとけて、野の宮のあはれなりし曙^{あけぼの}も、みな聞こえいでたまひてけり。

頭中将の娘である旨を頭中将本人に打ち明けた、という意で使われているから、「自分の秘密を自分から白状する」と解釈したい。ちなみに池田亀鑑氏編『源氏物語大成 索引篇』に拠っても、又、渡辺仁作氏著『河内本 源氏物語語彙の研究』に拠っても「言ひあらはす」の用例は当該例以外に無い。

五つめの共通点を挙げると、段落全体が「あはれなり」という形容動詞で締め括られている。

さてここで第三ブロック中の句を並置することにしよう。

①	②呼称	③	④②の様態動作	⑤	⑥時	⑦	⑧	⑨
かの	いざよひ	の	さやかならざり	し	秋	の	こと	など
かの	斎宮	の	下りたまひ	し	日	の	こと	……など

こうして見ると、左側の句は右側の句のいささか難解な修飾・被修飾関係を判然とする役割を持つように思われてくる。詳しく言い直すと、初めに紹介した通り、「さやかならざりし」の下に読点を打って「さやか」でなかった春の十六夜の出来事と秋の出来事と二つに分けて読む説が室町時代、例えば『葉抄』あたりから現在に至るまで非常に有力だったし、実際、一応筋の通った説なのだが、そうではなくて「……さやかならざりし」を「秋のこと」につなげる読みを種明しするのが「……下りたまひし日のこと」だと思ふのである。そしてもう一つの種明しとして注目すべきは、勿論、「かの斎宮」が女性の呼び名であることだ。これによって「かの十六夜」もまた誰かしら女性の呼び名であろうと示唆される。

更に、先程は「……」と省筆した賢木巻⑨の挿入句に着目す

ると

さやかならざりし	(容貌のをかしくおはせざりし)
(さやかに見し)	容貌のをかしくおはせし

のように両句の対偶性が一層明らかになる。

以上、葵巻「かの十六夜……」を一巻あとの「かの斎宮……」と一卷まえの「かの有明……」に基づいて考えてみた。結論として、現代語訳を記す。

【訳】末摘花の姿がはつきりとは見えなかった秋の(新枕の)ことなんか

補

対偶性のある女性呼称と言えはすぐ頭に浮かぶのが「朝顔」——「夕顔」である。鑑賞用にしか植えぬ朝顔の花、あやしき垣根に咲く夕顔の花は、それぞれ、式部卿姫君の高貴性、下の品の女々顔を実によく表象する。「有明の月」——「十六夜の月」についても、同様に言えるだろう。

臘月夜尚侍は、光源氏の気持ちに即して言うなら、別れるときいつもあわただしく消えてしまうのが第一印象だ。もう少し一緒に居たいと思っているのに、突然邪魔が入ったりなんかして、あっけなく別れることになる。だから「有明の月」「かの有明の君」と呼ばれているのではないか。普通の月は西の方に傾いて行つて傾いて行つて少しづつ山の端に姿を消す。けれども、

有明の月(陰暦二十日過ぎの月)は、まだ中天にあるのに突然パツと消えてしまう。

一方、末摘花は、出てくるまでとてもじれったかった。だから「十六夜の月」、「いざよふ月」、「ためらう月」のイメージで捉えられるのだと思う。

(付記)

本稿は平成二年度中古文学会秋季大会(於宮城学院女子大学)口頭発表をもとにまとめたものである。席上、宗雪修三先生、吉岡曠先生に、発表後、諸氏に、貴重な御教示をいただいた。記して心から謝意を表します。